

飛驒南部の産育習俗

下呂町の事例

佐野正隆

はじめに

飛驒南部（岐阜県益田郡地域）の産育習俗については、まだその実態が解明されているとはいえない。従来の調査報告をみると、昭和10年に恩賜財団愛育会（現、恩賜財団母子愛育会）が全国にわたって実施した産育習俗調査の資料が最も古く、これには萩原町・金山町からの報告があった¹⁾。この後は戦前・戦後を通じて長らく当地域の調査はされなかった。しかしながら、ようやく文化庁が第一次（昭和38年度）、第二次（昭和53・54年度）と2回にわたる緊急民俗資料調査を実施し、産育習俗もその中の項目にもりこまれたのであった²⁾。この調査では調査地点として馬瀬村中切・下呂町乗政（以上、第一次）、馬瀬村惣島・萩原町四美・金山町福来（以上、第二次）が選ばれた。こうした国家的事業と並行して、市町村史誌の内容に民俗資料も位置づくようになり、産育習俗もその一部として記述されるようになった³⁾。しかしながらこうした調査報告は概略的・断片的なものが多く、調査地域の産育習俗の全貌が把握できるような体系をもつものはほとんどない。

本稿ではこうした過去の実績をふまえ、下呂町の産育習俗の調査報告を行うものである。下呂町は飛驒南部において小坂町と並んで最も調査の遅れている地域である。実際の調査地点は東上田・森（以上、旧下呂町）、乗政・野尻（以上、旧竹原村）、夏焼・門和佐（以上、旧上原村）、久野川・火打・保井戸（以上、旧中原村）の9地点である。これらは行政村と区別し、いわゆる村落共同体を意味するものとして、「ムラ」という用語を使用した。報告する資料の時期は大正後期であるが、その前後の変遷を示す資料については時期を明示した。

なお、本稿をまとめるに当たり御指導を賜った文化庁文化財調査官天野武先生、話者の選定等に御尽力いただいた下呂町教育委員会大久保潤氏、及び、多くの地元の方々に厚く御礼申し上げる。

1. 下呂町の概観

下呂町は飛驒南部、飛驒川の中流域に位置する。以前は旧下呂町・竹原村・上原村・中原村に分かれていたが、昭和30年に合併して現在の下呂町となった。昭和56年1月1日現在、戸数4,486戸、人口15,735人であるが、これは合併当時の人口16,162人（昭和30年国勢調査）と比してほとんど増減がない。しかし地区別では周辺の山村地域である竹原・上原・中原はいずれも減少しており、過疎化の傾向がみられる。集落は飛驒川、及びその支流に沿ってひらけた狭小な低地に立地している。土地利用をみると耕地はわずかに3.4%にすぎず、山林が89.5%と9割近くを占めている。産業は旧下呂地区では天下の三名泉、下呂温泉をひかえている関係上、旅館・ホテルなどのサービス業、及び飲食店などの商業がさかんである。それに対し周辺地区では農業が中心であるが、専業農家は少なく、ほとんどが第二種兼業農家であり、旧下呂地区への通勤者が多い。生産物は主に米であるが、一部には家畜やトマトなどの換金作物と組み合わせた経営もみられる。道路は飛驒川に沿って国道41号がのびており、北は高山市、南は金山町を経て岐阜・名古屋方面に通じている。この道路は近世期、飛驒街道と呼ばれ、美濃と飛驒をつなぐ重要な交通路であったが、現在もその性格は変

わってはいない。また国道257号は旧下呂地区を基点に町内を竹原川に沿ってのび、舞台峠を越えて加子母村、更に東濃の中心、中津川市に通じている。一方、国鉄高山本線は国道41号と並行して走っている。宗教は臨済宗が圧倒的優位を占め、他宗派は信者・寺院ともごくわずかにすぎない。竹原・上原から東濃一帯にかけては農村歌舞伎が伝承されており、それを上演する舞台も数多く残されている。中でも門和佐には天領飛騨国の口留番所がおかれたことから国指定の白雲座がある。

2 妊娠に関する習俗

(1) 妊娠

妊婦が妊娠したことに最初に気づくのは月経が止まることからである。これについては「ヤクが止まる」(乗政)、「ヒが止まる」(久野川)という。しかしながら初産などの場合はまだ半信半疑である。これがはっきり妊娠したと確認するのは、3か月目につわりのあった時である。つわりの程度は人に差がある。眉毛が抜けたりする(乗政)こともあるが、吐き気がして物が食べられなくなることが多い。時には口がさっぱりしないことから、イロリの灰や渋柿を食べたりする(乗政)。このように食生活にふだんと差が出てくることから、妊娠を姑に隠そうとしても自然に知れるのである。

妊娠したことがわかるとまず母親や主人に打ち明ける。すると母親はテジナ(手品)を持って婚家へ「児ができたので頼みます」とタノミに行く。しかし、これをすぐに行わずに5か月目まで待ってハラオビ(腹帯)などを持ってタノミに行く事例も多い。

妊娠はミモチと呼ばれ、周囲の人からは一般に「ミモチになった」、「児ができた」などといわれる。ほかに「ヤワラコウておいでる」(森・乗政・夏焼)、「オオハラになる」(東上田)ともいった。

(2) ハラオビ(腹帯)

妊娠5か月目になると妊婦はハラオビ(腹帯)を巻く。初子の場合は実家から贈られてくるのが一般的だが、婚家で用意する事例も多い。ハラオビは白の晒で長さ1丈程度である⁴⁾。犬は産が軽いといって戌の日に巻く風が強い。妊婦自身が巻くことが多いが、姑(乗政・野尻)・トリアゲバアサン(火打)に巻いてもらう場合もある。巻き方については腹が大きくなると難産するといひ、胎児が大きくなりすぎないようにある程度きつく締める(東上田・森・乗政)。

こうしたことをオビイワイ(帯祝い)と称し、意識・行為ともに上記の伝承とは違いを示している事例もある。母親が仲人とともにハラオビと餅12個とを持ってタノミに行く(門和佐)、母親がハラオビとカイモチ(おはぎ)を持ってタノミに行く(久野川)などがそれである。

(3) 妊娠中の禁忌・俗信

出産の無事と出生予定児の健康を願う気持から、妊婦に対しては各種の禁忌が課せられてきた。それは産婦の行動を強く規制していたが、内容的には行動に関するものと食物に関するものとに大別される。しかしながらこれらの中には現代の科学からすると、一方的解釈にもとづく俗信も多い。

行動についてみると、火事を見るな、見ると赤アザのある児が生まれる、死人を見るな、葬式に出るな、これを犯すと黒アザ(青アザ=久野川)のある児が生まれる、やむを得ない場合は懐に鏡(白紙=夏焼・久野川)を入れておけ、などといわれる。また、重い物を持つな、高い所に手をあげるな、^お呷・袋にすわるな(フクロゴが生まれる)、などが一般的である。このほか箒をまたぐな(ホウキの神が出産の邪魔をする=保井戸)、馬の道具をまたぐな(産がのびる=東上田)、頭の額に近い箇所にマイマイ一つむじーができる=久野川)などがある。

食物では兎の肉を食べるとイグチ(兎口)の児が生まれるとして兎の肉を忌む風は広い。ほかに、柿(流産する=保井戸)、山芋(流産する=門和佐)、卵(フクロゴが生まれる=久野川)、トウガ

ラシ(門和佐, 出生児の眼が悪くなる=東上田), トウモロコシ(出生児にできものができる=東上田)などを忌む。これとは逆に初卵は安産するとして積極的に食べるものとしている。このほか双子が生まれるものとして、フタグリ(双子の栗=東上田・乗政・久野川), 卵黄の2つある卵(東上田)がある。

なお、妊婦と妊娠している犬・猫・家畜とが同居する場合は勝ち負けがあるといって嫌う(門和佐・久野川)。また、同一家屋に妊婦が2人いる場合も同様の意味から1人は別の場所で出産しなければならない(火打)。

妊婦は、かんしゃくを立てると意地悪い児が生まれるとして、いつも気持を落ちつけるよう心がけていた(夏焼)。このほか便所をきれいにしておくときれいな児が生まれるという伝承は一般的であり、髪をきれいにしておくときれいな児が生まれるという事例もある(夏焼)。

胎児の性別は、妊婦の腹の左にいれば男児、右にいれば女児、妊娠の顔つきがきつくなると男児、変わらなければ女児、更に、妊婦の動作が硬いと男児、柔らかいと女児と判断するのが一般的である。ほかに、妊婦の腹が大きいと男児(東上田)、腹の中で胎児があばれると男児(門和佐)、前に生まれた児にスリコギとシャモジをとらせ、前者をとると男児、後者をとると女児(久野川)とするなどの事例もある。

(4) 安産の祈願と呪法

今も昔も出産に際し、安産を願う気持に変わりはないが、その強さにおいて以前は現在と比べてはるかに大きかった。医学が未発達で、出産で死亡する人が少なからずあったのである。下呂町では旧下呂地区を除いて、町の南東にある舞台峠を越えたところにある加子母村小郷の地藏様(通称、大杉地藏堂)に安産祈願をするのが一般的である。参詣すると境内にある大杉の皮をもらい受けてきて懐に入れておくと言われる。一方、旧下呂地区、とりわけ東上田では萩原町にある禅昌寺観音に詣り、安産の御守りを受けてくる人が多い。このほかムラ内に祀られている子安地藏に詣る人も多い。こうした祈願がかなって無事出産すると身内の者が早速お礼詣りをしたのである。

出産の無事を願う気持は一方で様々な呪法をうみ出した。妊娠中は熊のヒャクヒロ(小腸)をハラオビに入れておく(東上田・乗政)。臨月が近くなると体を暖めるだけでなく、油ですべて児が生まれやすくなるということからクルミを煎じて飲む(東上田・門和佐・保井戸)。そしていよいよ陣痛が始まると、ムラ内の観音堂などや大杉地藏堂からいただいてきたローソクの燃えさしに火をつけたり(燃えつきるまでに出産する=門和佐・久野川・保井戸)、汲んでおいた手桶の水を流したりする(火打)のである。

(5) 妊娠祈願

児がないことは家の継承に重大な支障をきたす。したがって児ができないことはその直接当事者たる女性のもとより、その家にとっても子授けを願う気持には切なるものがあった。妊娠祈願は安産祈願同様、旧下呂地区を除いて加子母村小郷の地藏様に詣るのが通例である。ほかに長野の善光寺に参詣する人もいる(森)が、妊娠祈願の習俗は全般的に少ないようである。

3. 出産に関する習俗

(1) 出産

医学が十分に発達していない時代においては、出産は現在とは比較にならぬほど大変なものであった。頼れるものはトリアゲバアサン(現在の産婆の代わりを勤める人)だけであり、産婦は文字どおり産みの苦しみを味わったのである。この事情を示す言葉として、「お産が済むまでは片足を

棺桶につっこんでいるようなものだ」(野尻・久野川)、「障子の棧が見えるうちは生まれぬ」(乗政・門和佐・久野川)などがある。このように出産とは女性にとって生死をかけた一大事であった。しかしながらその一方で誰の助けも借りずに独力で出産を済ませる事例もあった。

出産は初子にかぎり実家に帰って行く事例(火打)もあるが⁵⁾、一般的には初子から婚家で出産する。産の場所としては、へやと呼ばれる寢室があてられた。当時、へやはムシロか、せいぜいへり(ヘットリ)を敷いているのが一般的で、タタミはごく一部の家に限られていた。産の床を用意するにあたってはタタミの場合は別として、たいていはこうした敷き物をとり除く。そして悪いムシロに敷き換え、その上にスグタ⁶⁾・合羽・ボロ⁷⁾などを敷いたのである。これらの中ではボロが最も一般的に使用された。このほか古ブトン(一般)をはじめ、スグタ(東上田)、ワラ灰(東上田・門和佐)、糠灰(久野川)、など各種のフトンが作られ、使われた。このように産の床は様々であり、しかも同じムラの中でも家によって差がみとめられるのである。

出産の仕方は、明治時代はすわり産が一般的であったが、大正後期はすわり産と寝産が混在しており、すわり産から寝産への移行期にあたっているようである。すわり産の場合は、天井からチカラヅナ(力綱)をつるして、これにつかまったりする(夏焼・久野川・保井戸)。明治時代にはワラゾク2束⁸⁾を体の背後にすえ、これにもたれて出産したという(東上田)。一方寝産の場合は「頭はカミミズに争っては生まれぬ」といって、妊婦は児が川の流れて生まれるように寝る(火打)。いずれにしろ、産婦自身が自力で出産する事例は少なく、一般的にはムラの中でトリアゲバアサンとかトリアゲババサと呼ばれる、器用で経験豊かな老婆に頼んでトリアゲてもら⁹⁾。しかしながら中には老爺にトリアゲてもらった人もいた(保井戸)。

難産の場合は上記のチカラヅナをよく用いた(東上田・野尻)が、季節的にみると難産は冬季が多かった。この時は蒸したばかりの大根葉(門和佐・火打)、炒ったばかりの米糠(門和佐)を袋に入れ、腰に当てた。こうすることで出産も楽になるのであった。

出産に際して夫は家にいない方がよいという事例が多いが、中には、初子の時家にいると第二子からも家にいないと出産できないといい、反対に家にいなければ、第二子からもいない時に生まれるという(保井戸)。

(2) 産神

出産に立ち合い、無事出産するよう見守ってくれるのが産神であり、ウバガミサマ(乗政)、オビガミサマ(門和佐)などと呼ばれる。出産に際してはヤオヨロズの神がやってくるが、最後にホウキの神が馬に乗ってやってくる。これではじめて出産ができる(久野川・火打・保井戸)。したがって女性はふだんから箒を大事に扱い、使わない場合はウラ(先端)を上にして立てておくか、掛けておくものであり、ましてやまたぐことなどは絶対にしてはならない。このように下呂町南部では産神はホウキの神の性格を持つ。産神に対しては、出産するとすぐに炒った大豆(門和佐)、3日目にはミツメの団子(門和佐)・小豆飯(乗政)を供える。産神に関する伝承は一部のムラを除き全般的に希薄である。

(3) 後産・臍の緒

後産は一般にノチザンといい、アトザンということもある(東上田・野尻・火打)。その処理については、たいてい主人をはじめ男衆がその日のうちに行くが、2、3日たってからの事例(森)もある。時刻は陽に当てるのを強く忌むことから、早朝か、日没後を選ぶ。埋め場所としては墓地が一般的だが、この一隅に不浄物を捨てるための大穴を設けているムラも多い(夏焼・保井戸・久野川)。このほか、畑のカゲ(乗政・野尻)、便所の裏(東上田)、人に踏まれない所(踏まれる所だと生児は出

世できない＝火打)があり、更に、その方角を問題にし(野尻)、その年の恵方に埋める事例もある(乗政・門和佐)。埋める場合は通例、産の床として使用したボロ・合羽などに包んで処理するが、中にはきれいに洗って清め、白紙に包み、水引をかける例もある(火打)。後産を埋めた上をはじめて通った虫を生児は一生恐れるという俗信がある(火打)。なお、後産がおりずに上がってしまうことをマキザンといい、これで死ぬ人もいたのである(夏焼・門和佐)。

臍の緒はトリアゲバアサンがオナワで縛り、その先をハサミで切る。縛る所は生児からイソクデ(手の一握り)の箇所であり(乗政・野尻・久野川・火打)、これが生児から近すぎると小便が近くなり、反対に遠すぎると小便が遠くなるという(夏焼)。同様の俗信は、切る箇所についてもある(東上田・火打)が、ほかに、縛った所から近くを切ると次子が早く生まれるという事例もある(久野川)。これとは反対に遠くを切ると、実際、生児を湯につかわす時など、マジが悪かった(世話がしにくかった)のである(久野川)。1週間くらいして落ちた臍の緒は箆笥や櫛箱の引出しに入れる(火打)か、鴨居につるして(東上田・火打)保存しておく。その一方で人がよく踏む入口の敷居の下に埋める(東上田・森・乗政、生児は愛嬌がよくなる＝久野川)、畑に埋めるなどの事例もある。保存しておいた臍の緒は、一般に生児が大病した時に煎じて飲ませるが、ほかに、遠出をする場合に携帯すると脚気にならない(火打)、博奕など勝負事をする時に所持していると相手に負けない(野尻)、生児が川で溺れて行方不明の時、臍の緒を流すと生児の居所に流れつく(保井戸)など用途はさまざまであった。

(4) 産の忌

出産は穢れるものとされる。穢れは産婦はもとより、家族に対しても及ぶ。これを「ボクがかかる」(火打)、「チボクがかかる」(夏焼)といっている。

産婦にかかる忌は強く、その程度は忌明けまで変わらず続くといつてよい。したがってそれが他に及ばぬよう様々な禁忌が産婦に課せられる。シチヤ(七夜)までは、へやから出る場合は上草履をはく(森・火打)、茶は汲めない(乗政)とされる。しかしながらこうした禁忌も忌明けまで続くものとする伝承も多く、更に、神祀りしてあるオクテイに入れず、まして神棚には近づけない、便所に行くなど少しでも外に出る場合は陽に当たるのを忌んで笠をかぶる、かまどなど火をかまうことはできない、とされるのである。

別火の習俗については、明治時代に産婦の食事は火を別にしたという(門和佐)が、大正時代は、産婦の飯は既に家族のそれと区別せず、同じ火で炊くようになっていた。しかしながらお櫃は別にする(夏焼)、一度別の茶碗に盛ってから当人の茶碗に移しかえる(野尻)など別火の意識をとどめる習俗はわずかながらも残っていたのである。

忌明けは、産の穢れがはれ、体がきれいになる日である(乗政)。これをイミアケ(森)、ユミアケ(東上田)、オビアケ(夏焼・門和佐・火打)、オビヤアケ(門和佐)、オビヤアガリ(乗政・門和佐)、オビヤがあく(保井戸)と少しずつ違った言い方で呼んでいる。その日は男児21日目・女児20日目のムラ(東上田・森・乗政・野尻)と男児20日目・女児は18日目のムラ(夏焼・門和佐・保井戸)に分けられるが、これを地区別でみると旧下呂と竹原が前者、上原と中原が後者に一応区分できる。いずれにしろ女児が1、2日早い、これについては女性はこのあとも毎月フジョウ(不浄)があるが、男性はないので、生まれた時だけは男児に穢れが余計にかかるのだという(火打)。なお、明治時代には忌明けの日は背もたれとしてのワラ40把を1日ごとに2把引き抜いて数えた。そして21日目になるとワラは全部なくなるので床上げし、忌明けとしたのである(東上田)。忌が明けると家族の茶碗をすべて洗い、イルリ(炉)の灰をかえる(乗政)。産婦はかまどを塩で清めてから自由に使

えるようになり(火打), また, 何の制約もなく外出したり, フロに入ったりすることができるようになる(一般)。忌明けの儀礼としては, 食物の贈答, 宮詣り(東上田・森), 出産祝い(東上田・森), それに生児の里帰りがある。宮詣りと出産祝いは後述するとして, 食物の贈答には餅(火打・保井戸), オハギ(門和佐)を, オビヤシナイ(出産見舞)をもらった家に贈る事例がある。生児の里帰りについては忌明けの当日(夏焼), 2, 3日後に(東上田・森)産婦が生児を連れて行く。実家に生児を見せるためである。テジナとして餅や赤飯を持参し, 1, 2日泊まってくるのが通例である。これをハツアヨビ(森・夏焼), アヨビゾメ(東上田)という。

このように忌が明けてもそれと矛盾するかのようになり、「オビヤ50日」(夏焼), 「オビヤ60日」(門和佐)として産婦はその日まで氏神に参詣できないとする伝承がある。更に, 言葉だけだが, 「オビヤ100日」(野尻)という事例もある。忌は一度に明けるのではなく, 段階を経て次第に薄れていき, 最終的にこれらの日で完全に明けたのかもかもしれない。

産婦以外で最も強く穢れがかかるのは生児であろう。生児の忌については, 忌明けまでは陽に当てるのを忌んで外には出さない(夏焼), オムツは陰干しするもの(一般)という伝承がある。また, 一般の家族も忌明けまでは氏神に参詣できない(東上田・森・火打)。

(5) 産婦の保護

産婦は出産に多大な精力を使うことから体力の消耗は激しい。この回復をはかり, ふだんの健康な体に戻るまで産婦には養生がはかられる。

出産したあと産婦はすぐに, 頭が病めるといけないといってハチマキをし(森・火打), 背後に積みあげた布団にもたれて(森), ヘヤで過ごすものとされる。こうして静養を続けるが, 早い人は3日目, 普通はシチャを過ぎるころから床上げをしてヘヤを掃き出す。そして少しずつ仕事をするようにするが, 最初は勝手仕事など家の中でできる楽なものから始める。しかし針仕事は早くからすると顔がウク(はれる), 肩がこる, 目が悪くなる, 血がのぼるなどといわれて忌が明くまではあまりやらない。忌が明くと針仕事はもとより, 機織りもすることができるようになる。産後も約1か月たち, ほぼ元の体力に回復すれば, 養蚕や畑仕事などの荒仕事をした。しかし手間のない家や農繁期などにはこのようにもしておかず, 早い時期からきつい仕事もしなければならなかった。そのため無理がたたって体を悪くした人もいた。こうしたこともあって産後75日もたてば元の体に戻るといったのである(森・東上田)。

なお, 産婦は産後しばらくは風呂に入れない。しかし早ければ3日目, おそくとも7日目くらいまでにはシモユ(下湯=保井戸)・コシユ(腰湯=東上田)につかる。これには塩や大根の干し葉を入れて沸かす。塩は体を清め, 大根葉は体を暖める(保井戸)。一度つかればあとは何度つかっても構わない。しかしまだ風呂には入れないが, 忌が明けるとようやくそれも自由になるのである。

食事については, 「お産のアトバラ(後腹)はカキタ(搔き田)のようだ」(門和佐)といわれることから, 様々な配慮がなされた。しかしながらその中にはこじつけ的な俗信もみられる。

まず出産直後に生米3粒を食べさせる(火打)。産婦の常食は白米の粥に, 梅干か鰹節のしょうゆ味が一般的であるが, 当時は鰹節のかわりに鰹の缶詰も結構使われた。ほかに焼塩もある(門和佐)。食べる期間は人により異なるが, 3日から10日程度である。その後は白米の飯に変わり, 忌が明ける頃から家族と同様, 常食の麦飯に戻るのである。オサイは一般に消化の良いものを選び, 消化の悪いもの(するめ・小豆), 油こいもの(鰯・鯖・鰯・鯉), あくのあるもの(かぶら), 生もの(生水・生塩), 辛いものは避ける。更に柿も, 血がさわぐ(森・東上田), 頭が痛くなる(東上田), 毒(乗政・門和佐・火打・保井戸)として避ける。これらは元の体に戻る75日まで食べるのを慎しむ(東

上田)。反対に、鯉・餅は乳が出るようになる(一般)、ズイキは古血が降りる(一般)、ユリは腹が固まる(森)、として積極的に食べる。

出産見舞として近親者からシチヤくらいまでに種々の食物が贈られてくる。鯉節(保井戸)、鯉の缶詰(東上田・夏焼)、鯉(森)、カイモチ(東上田・森)、黒豆(火打)などもあるが、一般には米か餅である。量は米1升(門和佐・火打)など一応の目安を決めているムラもある。いずれも産後の食生活に欠かすことのできないようなものばかりであり、そこには贈る人の暖かな配慮がはっきりとうかがえる。こうした出産見舞をオビヤシナイ(一般)、オビヤミマイ(夏焼・門和佐)と呼んでいる。この時、生児の着物や布きれを一緒に贈る事例もある(東上田・森)。

4. 出生児に関する習俗

(1) 生児呼称と出生に関する俗信

生児は生まれ方や生まれた年・日について種々の呼称や俗信を持つ。

まず生児の男女を区別する時は、男児はボー、女児はビーという。すぐ前の生児の生年を基準としてみると、翌年に生まれた児はトシゴ、3年目の児はミツブセ(一般)、ミツガタリ(夏焼)と呼ぶ。後者はほかに「3つにかてとる」とか、「3つにかてた」などともいう(火打)。更に4年目の児はヨツブセという(東上田)。実際、統計的にみるとミツブセが多くトシゴやヨツブセは少ない。生児を育てる上からもミツブセが一番であったようだ。生まれ方では、頭からでなく脚などから生まれた児はサカゴ(逆児)、臍の緒を首に巻いている場合はケサガケ(袈裟掛け)と呼んだ。また、婚外児はマカナイゴ(一般)、ヤシナイゴ(野尻)、テテナシゴ(夏焼)という。出生した年・日については生児の将来に関する俗信が多い。酉年の児はバタバタして落ちつきがない(森)、庚申の日に生まれた児は人まねが上手(森)・人の物を盗む(門和佐)、ゴウの寅に生まれたら誰にも負けない(門和佐)などがそれである。寅年(森)・丑年(門和佐)の児は兄をトル(殺す)といって他家に与えたりした。なお、生児の尻にある斑点は、この世に出る時、閻魔様が棒で突き出した跡であるといわれた(東上田)。

(2) 生児の取扱い

生まれた児はまずトリアゲバアサンがウブユ(産湯)につかわせる。専用のシモグライか、普通のタライのいずれかを使うが、後者の場合は使用后、必ず塩で清める。ウブユは漆の木でたく(野尻・門和佐・久野川)、漆塗りの椀などをウブユの中に入れておく(東上田・保井戸)と生児は一生漆にかぶれることはない。使用した湯は陽に当てるのを忌み、捨てる場所はへヤの床下(乗政)、便所の不浄物捨て場(夏焼)、センタクバ¹⁰⁾(洗濯場=乗政・夏焼・門和佐・久野川)、便所の溜桶(東上田・火打)、便所の裏(森)、縁の下(火打)などである。このほかナルテン(南天)の根元という事例もある(野尻)。捨て場所が悪いと生児は夜泣きするという(東上田)。

ウブユの後、生児は手を体の手前で組ませ、古着・ボロなどの軟かい布で、マルツツミに(夏焼)包み、紐で縛っておく。手を通すこともないではないが一般に少ない。また、紐の変わりに六尺褌を使うと生児は父親の言いつけをよくきくようになるという(保井戸)。

生児が初めて口にするのは母乳ではない。母乳は出産後すぐには出ないことにもよるが、しばらくはその代わりとして一般に苦いものを与える。ススミズ(煤水=東上田・火打)、番茶(森・夏焼・野尻・門和佐)、タヌキの胃(門和佐)がそれだが、砂糖水のことも多い(東上田・森・野尻・夏焼)。生児には鳥の羽や脱脂綿で作った乳首形で吸わせる。これらは乳の代用であるが、生児の体毒をおろす効用もあった。しばらくすると乳が出るようになるが、アラ(新)の乳から飲ませると生児の体毒が出る(保井戸)。乳はアリダケブルマイであった(夏焼)が、少なかったり、出ない場合は、よく

出る人にもらい乳をしたり、鯉・餅を積極的に食べる。また、下原村(現、金山町)の乳岩様(乳状の突起がある独立した岩)に祈願する場合(夏焼・火打・保井戸)や、便所の桶にかけたウブユに紐をたらしこんでおくという俗信(門和佐)もある。これとは反対に乳が余る場合には乳をしぼるが、それを所構わず捨ててよいものではなかった。一般にナルテンの根元に納めたのである。こうしておけば、足りなくなった場合にここに茶をすえて祈願すれば出るようになる(門和佐)、次の児の時にも乳がよく出る(野尻)といわれた。乳の代用食には、炊って粉にした玄米を湯でドロドロに溶かして砂糖を少し入れたもの(夏焼・保井戸)、干した洗米を粉に挽き、砂糖を入れて煮たニコ(煮粉=東上田・乗政)がある。

オムツは当時、一般にシメシと呼んでいた。初子の場合は実家で用意する場合もあるが、普通は婚家で用意する。浴衣の古手などを使うが、現在と異なり輪状にせず、ボロ布を2枚重ね縫いして作る(森)。用意する時期については出産前ということもあるが、あまり早いうちから用意すると生児が、シトナならない(大きくなならない=火打)、寿命がない(東上田・夏焼)といって出産後に用意した。オムツの洗たくはシモグライで行う。そして忌明けまでは陽に当てるのを忌んで家の陰に干す。一方、使用した水は便所の裏に穴を掘って埋める(森)。これらの伝承は生児にも忌明けまで穢れが掛っていることを示している。また、オムツを夜干しすると生児は夜泣きするという俗信もある(保井戸)。

(3) ミツメとシチャ

生後3日目をミツメという。トリアゲバアサンが来て生児を湯につかわせる。済むと生児ははじめて着物に手を通す(森・夏焼)。しかし、手は手前で組ませ、上から紐で縛っておく場合も多い。家ではミツメの団子(門和佐・久野川・火打)、小豆飯(乗政)をつくり、産神などに供える。

生後7日目は一般にシチャ(七夜)というが、ナナツメという事例もある(東上田・森)。ミツメ同様、トリアゲバアサンが生児をまず湯につかわせるが、その後ウブゲ(初生毛)を剃る。剃り方は2通りある。一つは、ウブゲは穢れている(夏焼)、剃り残すと縮毛になるなど毛くせが悪くなる(火打)としてツルツルに全部剃る。もう一つは、ケシボウズ(久野川・保井戸)、ケシガリ(夏焼)、サラブタ(東上田)、オサラ(門和佐)などと呼ばれるように、上部を残して皿状に剃る。また、男児は前者に、女児は後者にと男女差を設けているムラもある(東上田・森)。前者では後頭部のミソツボ・ボンクノボと呼ばれる部分を剃り残すこともある。これについては生児が、ころんだ時、ウブガミサマが起こしてくれる(久野川)、川で溺れた時、金刀比羅様が引きあげてくれる(火打)ために必要な毛と説明している。更に、鼻血が出た場合、この毛を引っぱると止まるともいわれている(夏焼)。剃った毛は単に不潔として捨てることもあるが、その始末については何らかの意を払う場合の方がむしろ多い。生児の頭が固くなるように、踏台の下に入れる(保井戸)、敷居の下(森・乗政)・戸口を出た所(夏焼・保井戸)に埋める、四つ辻に納める(夏焼)のである。一方保存する場合は、一般に、臍の緒とともに(火打)簞笥に入れておくと、土蔵の棟からつるしておく伝承もある(門和佐)。なお、ウブゲ剃りを3日目(火打)、忌明け(東上田)に行う事例もある。

生児の名前は、大体シチャころまでに主人が中心となり、家族で相談して決める。付け方については、臍の緒を首に巻いて生まれた児はケサガケしているといわれることから、“ケサ”の文字を入れて付ける。末子はスエ・トメなども多いが、また、末子は一般にオトゴと呼ばれるところから、“オト”をつけて命合する場合も多い(東上田・乗政)。更に、庚申の日に生まれた児は大きくなってから人の物を盗むといわれたことから“金”の文字を入れて命名する(東上田・門和佐)。名前はこのように出生に因縁のあることがらに関係させて付ける場合が多かったのである。

なお、シチャに実家などごく近い親戚、それにトリアゲバアサンと、いずれも女性を招いて出産祝いをする事例もある(乗政・夏焼・久野川)。

(4) 宮詣り

誕生後、生児がはじめてムラの産土神様・氏神様に詣るのがハツマイリである。期日は、忌明けの日(東上田・森)、春秋の祭礼日(門和佐・火打)、土用三郎(夏焼)であるが、特定の日とせず、忌明け後の良い日を選んで行う事例もある(乗政・久野川)。生児は化粧し、額に紅(一般)か墨(森・久野川)を2点つける。そして実家などから贈られたウブギ(産着)など良い着物を着せる。テトオシ(手通し)を着せる場合は、紋付の平袖をカケベと称して上から掛けることが多い(東上田・森)。連れて行くのは母親と姑が一般的で、夫婦・トリアゲバアサンの例は少ない。神社では御神酒に餅・赤飯・洗米などを供えるが、これは同じムラでも家によって異なることもある。ほかに、生児がママであるようにとママ(大豆)を供えたり(森)、男女差を設けて、男児には餅、女児には団子(門和佐)、反対に男児には団子、女児には餅(夏焼・久野川)とする事例もある。ハツマイリの済んだ後、供え物、とりわけ餅は一般の参拝者に投げられる(夏焼・門和佐・保井戸)。帰りには生児を見てもらうため、親戚に立寄ることもある。帰宅すると門に立てた2本の竹に張りめぐらした注連縄の下をくぐる(門和佐)。このムラでは祭りの時、この注連縄によりその家にハツマイリがあることが一目でわかるという。また、祭りの前に死者が出ると「ブクがかかる」といってハツマイリは一年のびる。同様の伝承はほかにもある(夏焼)。

(5) 出産祝い

出産後に出産祝いが行われるのは通例である。これを一般に「シチャを祝う」とか、「シチャイワイ(七夜祝い)」と呼んでいる。その日は、7日目(乗政・野尻・夏焼・久野川)、忌明けの日(東上田・森)、忌明け後の適当な日(門和佐・火打・保井戸)と地域的に分けられる。実家・親戚・近所、それにトリアゲバアサンなどが招かれるが、7日目に行く場合は女性が多い。赤飯・煮メ・酒などでお振舞するが、中には川原から拾ってきた小石のオサイもある(東上田・乗政)。これは生児がかたく丈夫に育つようにとの呪いであるという。招待客は生児の着物や8尺程度の布きれなどを贈る。生児は額に紅を2点つけ(東上田・夏焼)、ウブギを着て、招待客に抱きまわしされる。こうした近親者を招いての出産祝いは、初子に限って行われるのが一般的で、第2子からは内祝いをするにすぎない。この儀礼によって生児の存在は広く周囲に知らしめられたのであった。

(6) 満1歳までの儀礼

食い初めに関する習俗では、わずかに生後100日に箸祝いといって生児に膳をつくり、飯一粒でも食べさせるといふ事例(保井戸)があるにすぎない。

なお、初生歯については、あまり早く生えると、弱い(東上田・夏焼・門和佐)、歯抜けになる(森)、といって嫌う。抜けた初生歯が下歯なら屋根にはおろしあげる、反対に上歯なら雨だれに埋める。あとからの歯が前者は上へ、後者は下へ、それぞれ向いて生えるようにとの呪いである。

初節供・初正月についても、特別に祝わない。しかし、この中で三月節供には実家・親戚などから男児に男の、女児には女のヤキピナ(焼雛)が贈られてくる(東上田・森・夏焼・門和佐・保井戸)こともある。人形は、歌舞伎もの・武者もの、それに風俗ものが多い。

このように満1歳までの儀礼は、初節供としての三月節供がわずかに行われる程度である。

(7) 初誕生

満1歳の誕生日はタンジュウとかタジュウと呼ばれる。この日は生児の無事成長を祝い、今後の成長を願って、誕生祝いが行われる。一般にタンジュウ餅を搗き、「実家にしょって歩いていけ」とい

って(森)、生児に背負わせる。当時では、実際こうして立つ児はほとんどなかったが、もし立って歩くと強いとって喜んだ。餅は実家・親戚などに配る。すると先方からお返しとして、マメで白髪になるようにと、大豆1升にオ(苧)が真綿が贈られてくる(東上田)。また、ミイワイと称して(保井戸)、生児を箕に入れ、生児に向かって餅を投げる(門和佐・久野川・火打)。更に、箕の中に農具・書物・算盤・包丁などを並べ、生児に拾わせる(森)。これは生児の適性占いである。初誕生の祝いは内祝いが一般的であり、近親者を招く(森・保井戸)ことはあまりない。こうした儀礼は初子のみで、第2子からはタンジュウ餅を掲ぐ程度である。なおこの日、宮詣りする事例もある(森)。

(8) ツブラ(イツミ)

生後しばらくすると生児はツブラ、またはイツミと呼ばれる用具に入れて育てられる。呼称についてはツブラの方が一般的であり、イツミは南部で聞かれる程度にすぎない。材質はサワラ・マキなどの板か、またはワラである。これを呼称と合わせてみると、ツブラは板製、イツミはワラ製といえる。したがって製作は、ツブラが桶屋にあつらえるのに対し、イツミは自家製である。使用時期もツブラは年中使用するのに、イツミは夏はウミル(蒸すように暑い=門和佐)とって使用しない。使い始めは、シチヤ(夏焼)、忌明け(東上田・森)とする事例がある。これらは、この日に行われる出産祝いに生児を入れて招待客に見てもらうのである。しかし一般的にはこうした儀礼と関係なく、生後1か月くらいから使い始める。「これで生児はオイエ持ちになった」という(東上田)。使用する際は底にスグタ・ボロを敷く。生児は両足を揃えてオムツにくるみ、紐で縛ってマルツツミにして、足を前に投げ出す恰好で入れる。周囲にはボロを詰め、生児が動かないようにする。数か月たつと生児は反るなどして自力で出るようになるので、把手を利用して肩紐をかけ、出るのを防ぐ。そして歩くようになるとツブラから出す。それは満1歳を過ぎてからである。仕事が忙しいことから生児はイツミに入れっ放しにされるが多かった。母親が昼に仕事から帰ってくると、小便でぬれたスグタなどをかえ、後部より一段低い手前の落ちこみより母乳を与える程度であった。しかし時には底に火吹竹を挿入して左右に揺り動かしたり、把手の紐を引っぱってツブラを引きまわしたりして生児をあやした。それでツブラは底がすりへることが多く、時々桶屋に頼んでシntax(底板)をかえてもらったのである。

生児が立つようになるとタチツブラに入れることもあった。普通のツブラは丸形であるのに対し、タチツブラは角形で下方がやや広い。立たせて使うことから足が疲れる。したがって食事の間などわずかな時間だけに使用したのである。

イツミを他人に貸したり、与えたりする場合には「ノポリイツミは良い、クダリイツミは悪い」とって必ずカミ(川上)の家に対して与えるものとした(夏焼・門和佐)。

(9) 育児に関する俗信

育児に気を配り、生児のすこやかな成長を願うのに今も昔も変わりはない。しかしながら以前は医学が十分に発達しておらず、また、医者も身近にいなかったことから、現在では何のこともない症状にも俗信が多く伝承されてきた。

夜泣きには、小郷の地藏堂の境内にある大杉の皮を背中に敷く(保井戸)、大工の上草履を枕の下に敷く(森)とよい。カンノムシは行者などに虫封じを依頼する場合が多い。メコジキは、メネブト(東上田)、モノモライ(乗政)ともいい、それに対しては一般に小豆を一定の場所に捨てて、後を見ずに帰ってくる。その場所は、井戸(夏焼・保井戸)、川(森)、辻(門和佐)などで、水に関係ある所が多い。更に、橋を渡らぬうちに(乗政)、物もらいする(東上田・夏焼)、着物の袂や裾の端を

糸でくくっておく(東上田・森・保井戸), 小豆を飲む(夏焼)こともよいとされている。また、火であぶったつけ櫛をメコジキにあててこすることも広く行われている。耳だれなど耳の病には、蚕飼薬師堂に願かけをし、平癒のおりにはシロガラ(皮をむいた楮)に竹をさして作った錐形を12本、すだれ状にして奉納する(門和佐)。イボをとるにはクモの糸を巻きつける(夏焼・門和佐・保井戸)、御厩野川のインボブチの水をつける(乗政)、四つ辻に切ったナスを埋める(森)、盗んできたナスでイボをこすり、それを縛って川へ捨てる(保井戸)、西国巡りをした人に踏みつけてもらう(夏焼)、など様々な方法がある。また、ハジカには麦のハジカ(先端の棘状部)を煎じて飲ませる(保井戸)。治るとサンダワラに幣束を立て、川へ納める(夏焼)。

こうした俗信にはその気持を理解できるものもあるが、その一方でその由来が不明なものも多い。

おわりに

本稿では産育習俗の一部を報告したのであるが、それも十分とはいえない。しかしながら、その中からも飛騨南部、下呂町の産育習俗として指摘できる点はいくつかあげられる。

まず、安産祈願には旧下呂を除いて加子母村小郷の大杉地藏堂に詣ること、産神は中原においてホウキ神の性格が認められること、出産は初子から婚家で行うこと、産の忌明けは、旧下呂・竹原では男児21日目、女児20日目であるのに対し、上原・中原では男児20日目、女児18日目と地区別にはほぼ区分できること、そしていずれにしろ女児が男児より1、2日早いこと、宮詣りは生後約1か月後ではなく、氏神の祭礼日に行われる伝承があること、出産祝いは、北部が忌明けの日、中部がシチヤに、南部は忌明け後の適当な日に行われること、ツブラとイツミについては、名称の相違は形態・材質の相違につながることで、両者の分布上の境界は南部に引けそうであること、などである。

また今後の問題点として注目されるのは、「オビヤ50日」などの言葉を実際に裏つける具体的な伝承の確認、宮詣りの日に注連縄を張る伝承と絡んで産神の去来、及び性格の推移、出産祝いに生児の膳に出された小石の習俗、などである。更に、今回の調査では十分資料の得られなかった妊娠祈願の習俗、産婦や生児の死亡に関する習俗、産の忌と生業との関係、別火の習俗、及び、子守り、児童の遊戯などである。

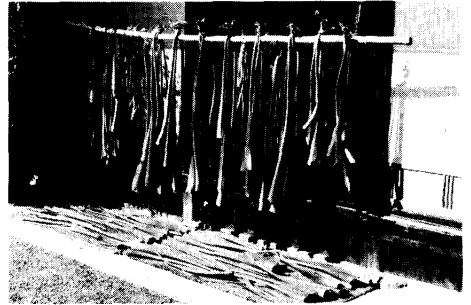
これらについては今後とも継続して調査を行い、十分な資料を得た上で発表したいと考えている。

〔註〕

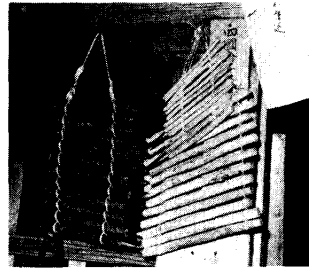
- 1) その成果は昭和50年『日本産育習俗資料集成』(第一法規)として刊行。
- 2) 第一次調査における産育習俗関係資料は、昭和52年『日本民俗地区一第5集一出産育児編』として刊行。
- 3) 萩原町誌(昭和37年)、小坂町誌(昭和40年)、加子母村誌(昭和47年)、金山町誌(昭和50年)
- 4) 児が生まれたあとはモリオビとして使用するので、1丈程度の長さは必要であった(久野川)。
- 5) 実家に帰っている期間が3か月にわたってはいけない。
- 6) ワラ細工の準備の時、ワラ打ちしてからとり除く外皮。
- 7) ムクヅ(久野川)、ツヅリ(東上田)などとも呼ばれる。
- 8) 稲藁のたば、1束=20把
- 9) 謝礼は大正時代、既に金で済ませることが多かったが、時には履物・真綿を贈る(門和佐)こともあった。以後のつきあいは家によって頼むトリアゲバアサンが決まっていたことから、末子を出産するまで毎年正月には餅を贈った(東上田)。
- 10) 便所のニワに仕切られた一角で、手前は土間、向こう側は石が敷きつめてある。



1 大杉地蔵堂（加子母村）



2 ズイキ（蛇之尾—旧上原村）



3 錐形（蚕飼薬師堂）

伝承者氏名（敬称略、生年月日順、明治27年は明27と略記）

東上田—縫とよ(明27)・日下部さい(明33)
森—立石つね(明26)・中川かよ(明33)
乗政—片田政一(明26)・片田わき(明29)
野尻—井上きよ(明30)・熊崎りよ(明32)
夏焼—田口ゆきの(明34)・田口つゆ(明38)

門和佐—今井準介(明31)・今井律(明41)・今井
かずよ(明43)・今井葛枝(明43)
久野川—進藤こよき(明35)・細江よしの(明38)
火打—今井よしの(明33)
保井戸—細江よそ(明25)・田口かよ(明33)